

科目名	開発研究入門 ＜2026年5月9日（土）・10日（日） 名古屋キャンパス（ハイフレックス開催）＞	2 単位
担当者	機能 聡子	
テーマ	開発研究に関わる基礎的理解と修士課程での学び	
科目のねらい	<p>＜キーワード＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開発研究、研究方法、フィールドワーク、修士論文、ネットワーキング <p>＜内容の要約＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本研究科のカリキュラムの基礎にある開発の考え方や研究方法論を習得する。合わせて、学習法ガイダンスなどを通じて、修士課程における学習の仕方、修士論文に向けた研究の理論枠組みの作り方や研究の進め方を理解する。 ・日頃はインターネット上で学習を進める院生にとって、この科目では、院生同士が直接の「顔合わせ」を行う機会でもあり、今後の研究活動や WEB を通じたコミュニケーションの円滑化を図り、また、ネットワーキングを行う。 <p>＜学習目標＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本研究科のカリキュラムの基礎にある開発の考え方や研究方法論の基本的な事項を理解できる。 ・修士課程における学習の仕方、修士論文に向けた研究の理論枠組みの作り方や研究の進め方を理解できる。 	
授業の進め方	<ul style="list-style-type: none"> ・本科目では、開発研究に関わる基礎的理解を図る講義と合わせて、リサーチ指導教員による研究指導や新入生の相互交流などネットワーキングを通じて、修士課程における調査研究の円滑な導入や促進を図る。 ・本科目は、集中講義形式で2日間にわたり終日行う。2025年度の当初プログラムを参考として以下に示す。2026年度のプログラムは、検討中である。 <p>【プログラム（2025年度）】</p> <p>2025年5月24日（土）</p> <ul style="list-style-type: none"> ■09:00-09:30 オリエンテーション及び自己紹介（吉村 輝彦・機能 聡子） ■09:30-10:30 講義「大学院での学びと研究方法」【その1】（吉村 輝彦） ■10:40-12:10 講義「論文の書き方」（野田 直人） ■13:00-14:00 講義「大学院での学びと研究方法」【その2】（吉村 輝彦） ■14:00-15:00 「図書館を使いこなすこと／図書館ツアー」 ■15:20-17:50 各リサーチ担当教員（指導教員）による研究指導 <p>2025年5月25日（日）</p> <ul style="list-style-type: none"> ■09:15-09:45 1日目の振り返り ■09:45-11:15 講義「(仮) これまでの開発実践経験を振り返る」（機能 聡子） ■12:15-13:15 講義「私の修論経験」（2024年度修了者） ■13:15-14:45 講義「(仮) 国際社会開発の理論と実際」（穂坂 光彦） ■15:00-16:30 院生による情報交流・意見交換ワークショップ ■16:30-17:15 全体の振り返り及びまとめ（機能 聡子・吉村 輝彦） 	
事前学習の内容・学習上の注意	<ul style="list-style-type: none"> ○修士論文に向けた論文計画の内容を確認し、必要に応じて、修正しておくこと。 ○指定したテキストを事前に読んでおくこと。 	
本科目の関連科目	「研究方法論」「福祉社会開発演習」「国際社会開発の基礎」「日本および東アジア地域開発研究」	
テキスト	適宜、指示する。	
参考文献	適宜、指示する。	
成績評価方法と基準	全2日間にわたる講義へすべて出席することを前提として、事前学習(30%)、質疑応答への積極参加等の受講態度(70%)を総合的に勘案して評価する。	

科目名	国際社会開発の基礎	2 単位
担当者	吉村 輝彦・小國 和子	
テーマ	開発とは何か。「貧しい国への一方向の開発援助」を前提とせず、人々の日常的な暮らしへの視点を中心に、自ら切り拓くプロセスとしての開発概念について理解を深める。地域のローカリティから国家間の関係まで、ミクロ、メソ、マクロの多次元から地域社会とその開発を相互作用的に捉えていく目を養う。また、この研究科ならではの、国内の福祉課題と国際開発課題を見通す視点を紹介し、受講生各自が自らの研究や実務関心に引き付けて議論する機会を提供する。	
科目のねらい	<p><キーワード> 開発、国際開発、開発福祉、開発の主体、プロセス、相互作用</p> <p><内容の要約></p> <ul style="list-style-type: none"> かつて、国際開発とは先進国と途上国の関係性を前提に、「貧しい国」を援助することだと考えられていた。しかし、世界の国と国、地域と地域の関係はこの70年間の間に大きく変わった。人間開発、参加型開発、人間の安全保障、そして、持続可能な開発といったキーワードが常識的に語られ、ケイパビリティアプローチをはじめ、人々が生きる選択肢を拡大できる環境整備が求められてきた。さらには、国境を越えた移動が常態化する中で、日本国内の多文化共生等、「国際開発」の現場は、もはや「海外の貧しい国」に限らず、だれにとっても身近なものとなっている。 この科目では、「国際開発」というタームが生まれた戦後の国内外の取り組みを確認した上で、その時系列あるいはセクターごとの展開をなぞるのではなく、本研究科で重視してきた、社会と自らが変わっていくプロセスとしての開発の考え方を中心に、国内も対象とする現代的な課題も射程において、議論を進める。 本研究科における学びの全体的な見取り図を確認しながら、担当者それぞれの専門的見地から論点を提供し、全体取りまとめは吉村が行う。受講者が自らの関心領域を捉え直していく機会としていく。 <p><学習目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 国際社会開発の基本的な課題や基礎的な理論を理解することができる。 上記を踏まえて、履修者自らのこれまでの知識や経験、そして、修士課程での研究や開発実践の方法を相対化し、自らのアプローチを確立する一歩とすることができる。 	
授業の進め方	<p>■第1回～第2回：イントロダクション（吉村・小國）</p> <ul style="list-style-type: none"> 担当教員からそれぞれの専門を背景とする国際開発への関心の説明を含めた自己紹介を行う。 履修者全員が、「開発とは何か」を提起し、また、他の履修者の投稿に対して、自らの問題意識や経験をも踏まえて、相互にコメントを寄せ合う。これらをこれからの学びの出発点として、共有する。 <p>■第3回～第4回：国際社会開発を見る目・その1 地域・まちづくりの観点から「開発」を俯瞰的に、かつ、対比的に捉え直す（吉村）</p> <ul style="list-style-type: none"> キーワード：「計画理論」「ガバナンス」「プロセス」「コミュニティ」「インフォーマリティ」等。 参考文献：穂坂光彦、ターナー、フリードマン、アーンスタイン他の文献。高見沢実編著『都市計画の理論』、ターナー『ハウジング・バイ・ピープル』、フリードマン『市民・政府・NGO』他。 事前に関連資料をPDFで配布、全員が読んだ上で討論を行う。履修者から進行役、討論担当者を設定。 	

	<p>■第5回～第6回：国際社会開発を見る目・その2 開発人類学の立場から「西洋文明」「開発援助プロジェクト」を相対化する（小國）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参考文献：サイード『オリエンタリズム』、レヴィ・ストロース『レヴィ・ストロース講義』、ファーガソン『反政治機械』他。複数の文献を紹介するため、教員より論点メモを提供し、それをもとに議論を行う。 ・事前に参考文献から抜粋資料を PDF で配布、全員が読んだ上で議論を行う。履修者から進行役、討論担当者を設定。 <p>■第7回～第8回：開発主体を巡る議論（1980-1990年代を中心に）（小國）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キーワード：「参加」「ジェンダー」「エンパワメント」等。 ・参考文献：イリイチ『シャドーワーク』、ロバート・チェンバース『開発調査手法の革命と再生』他。 ・教員の実務経験も交え、当時の開発潮流を振り返り、今につながる課題を確認する。 ・事前に参考文献から抜粋資料を PDF で配布、全員が読んだ上で議論を行う。履修者から進行役、討論担当者を設定。 <p>■第9回～第10回：開発の基盤を巡る議論（2000年代を中心に）（吉村）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キーワード：「ケイパビリティ」「人間の安全保障」「ソーシャルキャピタル」「内発的発展」等。 ・参考文献：セン、パットナム他。 ・教員のこれまでの経験も交え、当時の開発潮流を振り返り、その後の展開を含めて、今につながる課題を確認する。 ・事前に関連資料を PDF で配布、全員が読んだ上で議論を行う。履修者から進行役、討論担当者を設定。 <p>■第11回～第13回：開発のこれからを巡る議論（捉え直す・越境する・見据える）（吉村）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キーワード：「コンヴィヴィアリティ」「コモンズ」「レジリエンシー」「持続可能性」「リジェネレイティブ」「プラネット（地球）」「デザイン」等。 ・参考文献：イリイチ『コンヴィヴィアリティのための道具』、エツイオ・マンズイーニ『日々の政治』、エスコバル『多元世界に向けたデザイン』他。 ・近年の国際開発を巡る議論を、「改めて諸概念を捉え直す」「分野を超えて捉えていく」「これまでの捉え方を超えて未来を見据える」という観点から確認する。 ・事前に関連資料を PDF で配布、全員が読んだ上で議論を行う。履修者から進行役、討論担当者を設定。 <p>■第14回～第15回：振り返り及び最終レポート提出（吉村）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・履修者全員が、改めて、「開発とは何か」を振り返り、これからの論文執筆に向けた出発点としていく。 <p>なお、本科目では、以前、穂坂光彦『国際社会開発の基礎 2023』をテキストとして使用しており、今年度も適宜参照する。 WEB 掲示板での授業を中心としながら、授業の展開に応じて、ゲスト講師を招聘した講義や zoom 等のオンライン形式での講義を行うこともある。</p>
事前学習の内容・学習上の注意	セッションのテーマごとに、司会進行役を務めたいセッションと指定討論者を務めたいセッションとを決める。担当者は、セッションごとに紹介される資料や文献をはじめ、自分で関連文献や情報を収集したり、各自の現場での経験なども盛り込みながら、議論を行う。他履修者も、予め、提示された文献や資料に可能な限り目を通しておき、司会者と討論者の一対一のやりとりにならないよう、協働で豊かな意見交換を展開する。詳細はイントロダクションの週に掲示板上で説明を行う。
本科目の関連科目	本研究科の全ての科目と緩やかに関連する。

テキスト	テーマ毎に、適宜、事前に資料を配布するとともに、参考文献を提示する。インターネットからダウンロードできない文献に関しては、資料情報を提供する。また、以下の旧テキストも活用する。
参考文献	<p>1. 参照文献 (以前この科目で用いていた旧テキスト。国際開発の歴史をレビューする上でぜひ参照してほしい)。 ・穂坂光彦『国際社会開発の基礎 2023』(pdf にて配布予定)</p> <p>2. 関連文献 (以下、国際開発全般を網羅的に学びたい人のために、比較的新しく出版された出版物を何点か紹介する。これらの「関連文献」は、購入必須ではなく、履修者の興味に応じて入手し、自学に用いることを想定している。もちろん、これらを積極的に通読して、WEB 掲示板での書き込みで引用、紹介することを推奨する。全員必読のものは、別途 pdf で提供するが、ダウンロード可能な URL を示す予定) ・松本悟・佐藤仁(編)『国際協力と想像力 イメージと「現場」のせめぎ合い』日本評論社、2021 年 (「開発」をとらえる視点の多様化に向けて、上記の旧テキストとあわせて目を通すとよい)。 ・大森佐和・西村幹子(編)『よくわかる開発学』ミネルヴァ書房、2022 年 (国際開発における 21 世紀的な諸領域 (ガバナンス、ビジネスと開発、災害等) を中心に一般的な理解を深める)。</p> <p>3. 参考文献 (関連文献が出版される以前の文献を紹介する。分野を横断的に、また、超えて学ぶことの大事さと時代の変遷とともに、その射程が変化していることに気づかされる) ・菊池京子(編)『開発学を学ぶ人のために』世界思想社、2001 年 ・久野研二・中西由起子(編)『リハビリテーション国際協力入門』三輪書店、2004 年 ・大坪滋・木村宏恒・伊東早苗(編)『国際開発学入門』勁草書房、2009 年 ・西川潤・下村恭民・高橋基樹・野田真里(編著)『開発を問い直す』日本評論社、2011 年 ・国際開発学会(編)『国際開発学事典』丸善出版、2018 年</p>
成績評価方法と基準	掲示板での議論への量的・質的参加度(70%)と最終レポート(30%)により評価を行い、全体で 60%以上を合格とする。

科目名	研究方法論	2 単位
担当者	小國 和子	
テーマ	自らの視点を相対化し、論文のリサーチクエストを育てる	
科目のねらい	<p><キーワード> リサーチ・リテラシー、問いを育てる、仮説をきたえる、フィールドワーク、参与観察</p> <p><内容の要約> 本科目では、受講者の実務的な経験に端を発する「初発の関心」を、学術論文における「問い」へと鍛えていくプロセスについて理解を深めることを目的とする。 また、講師の専門である文化人類学を背景に、フィールドワークを中心とする質的調査の方法論と実践上の具体的な課題について、特に開発や福祉現場での調査を念頭において議論を行う。なかでも、受講生が自分のかかわった事業や身近な開発実践を事例として研究する上で考えられるバイアスの軽減や、求められる姿勢の獲得についてとりあげたい。</p> <p>他者の現実を聞き取り、分析し、書くという行為においては、調査者が自らのもつフィルターに自覚的になり、調査の質を保つことが求められる。また、この科目は質的な方法の紹介が中心となるが、実際に論文を書く際には、統計資料などをうまく活用して総合的にデータとしての説得力を高めることが必要である。</p> <p>本科目を通じて、研究・調査活動に際して求められる調査者としての姿勢や、質的調査の実践に必要なエチケットやマナー、技術を獲得し、自らの問題意識をリサーチクエストへと研ぎ澄ませ、修士論文執筆の準備を進める一助としてほしい。</p> <p><学習目標></p> <ul style="list-style-type: none"> ・初発の関心を学術的にも社会的にも意味のあるリサーチクエストへと発展させ、自らの修士論文における「問い」を見出すことができる。 ・聞き取りや参与観察など、質的データを主とするフィールドワークの方法を学び、実践することが出来る。 	
授業の進め方	<p>この研究科に属する社会人院生の特徴を踏まえ、この科目では、意図的に 3 冊のテキストを併用する。テキスト指定した 3 冊から受講生各自が自らの関心と経験に合わせて担当箇所を選び議論を進めることで、参加者の関心に即して議論のフォーカスを調整しながら授業を行う。テキスト①と②は電子書籍として入手が可能。テキスト③は全般的に平易に論文作成までの手順を説明してくれているので、紙ベースの本のみだが、参考書的に全員が通読するとよい。</p> <p>全体的なスケジュール案は以下の通り。テキストから院生各自が各セッション課題に関連するテキスト章を選び、複数の担当者の発表と全員でのディスカッションで授業を進行する。必ずしもすべての章を授業内で扱うわけではないが、修士論文執筆準備の一環で、自習用にといい意図も込めての 3 冊であること、ご理解願いたい。終盤は、課題レポートに対するピアレビューを中心に進める。</p> <p><u>セッション1</u> 「初発の関心」紹介、担当分担決め <u>セッション2</u> 研究視点を養い、問いを鍛える ・テキスト③より第1・2・3章 ・テキスト①より chapter2 「問いを育てる」・3 「仮説をきたえる」 <u>セッション3</u> 「これまでにわかっていること」を知り「まだわかっていないこと」を捉える ・テキスト①より chapter5 「文献レビュー」 ・テキスト③より第4章「なぜ「先行研究」をレビューするのか」 <u>セッション4</u> 研究プロセスに「調査」をうまく取り入れる ・テキスト②より序章「質的調査とは何か」 ・テキスト①より chapter4 「調査の企画と実行」・7 「リサーチデザイン」 ・テキスト③より第7・8・9章</p>	

	<p>セッション5 各論「フィールドワーク」 ・テキスト②より第1章</p> <p>セッション6 各論「参与観察、インタビュー」 ・テキスト②第2・3章 ・テキスト③より第5・6章</p> <p>セッション7 論文を書く ・テキスト③より第10・11章</p> <p>セッション8 課題レポートのピアレビュー</p> <p>※修士論文を書くにあたり、特にこれまでに学术论文を執筆した経験が不足していると考え人は、上で書いた通り、論文の書き方や研究方法論についての類書を2～3冊、同時並行で読み進めることで、共通項目を理解し、研究プロセスに関するセンスを養うことができる。この点、今回採用した3冊はいずれも、学部生から社会人までに向けた比較的平易な入門書であり、各一冊を深く読み込むというよりは、関連する項目（たとえば「問いを立てる」とは、ということについて3冊とも扱っている）を同時並行で読むことで、ポイントをより深く理解できるだろうと期待している。しかしそういう理解の仕方が成り立つためには、受講生諸君の間で、それぞれに読んでみた感想や意見が積極的に出される必要がある。3冊すべてを読み込んで参加することが難しくても、とにかく議論には参加しよう、という気持ちで受講してほしい。</p> <p>※開講時に改めて全体スケジュールと、各テキストをどのように併用するか、大体の提案を行う。ただし、すべてを網羅的にというよりは、その時々を受講生の関心に引き付けて多少の濃淡をつけたい。そのうえで、院生自身から希望を集約し、最初の2週間で各自の分担を決める（概要×意見、コメンテーター等、受講者数に応じて掲示板上で説明する）。その後は、議論の進捗に応じて柔軟に調整しつつ運用する。</p> <p>※受講者全員が授業の作り手となる。基本的には、各受講者の分担によるテキスト発表によって授業を進めるが、要約や一般論におわらせず、各自の経験や関心にひきつけた発展的な討議を重視する。また、必要に応じて講師の経験等を踏まえた事例の紹介も行なう。受講者各自が問題関心を積極的に開示して議論を進めていくことを期待する。</p> <p>受講者が自らの研究テーマにおいていかなるフィールドワークが必要且つ可能であるかを考え、実践の手助けとなる議論をすすめたい。また、受講者のフィールドワークや業務の現状等に応じて質疑応答ができるよう、授業の進行には柔軟性を確保したい。</p>
<p>事前学習の内容・ 学習上の注意</p>	<p>・授業開始までに指定テキストを入手し、ざっくり目を通して、自分の学習ニーズにあわせて担当を希望する本の章を検討しておくこと。</p> <p>・質的調査やフィールドワークに関する基礎知識がない場合、あるいは逆に、すでに素地があり、より深く学びたい場合は、下記などほかの参考文献も積極的に入手して読んでおくこと。</p>
<p>本科目の 関連科目</p>	
<p>テキスト</p>	<p>テキスト①佐藤郁哉(2021)『はじめての経営学 ビジネス・リサーチ』東洋経済(電子書籍 Kindle 版あり)。 テキスト②岸政彦ほか(2016)『質的社会調査の方法 他者の合理性の理解社会学』有斐閣(電子書籍 Kindle 版あり)。 テキスト③太田裕子(2019)『はじめて「質的研究」を「書く」あなたへー研究計画から論文作成まで』東京図書。</p> <p>※テキストを3冊併用する理由：この科目では2021年度まで、下記で参考文献に挙げている佐藤郁哉(2002)『フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえ</p>

	<p>る』(新曜社) 1冊を教科書指定してきた。同書は、漠然とした初発の関心から、「調べながら」リサーチクエスチョンを研ぎ澄ませていく過程を「仮説生成プロセス」として解説している点が秀逸であった。これが、実務上の漠然とした問題意識を有して入学し、問い自体を見直していくプロセスが重要となる本研究科の受講生にぴったりであった。</p> <p>しかし、出版から 20 年を経て、在外勤務者には入手し難い例が出てきたこと、また、近年の入学者の中には学術論文を書くこと自体がはじめてで、この 1 冊だけでは理解不足になりがちとなる場合があることから、上に述べた通り、「複数冊を併行して読むことで、理解を促す」戦略を採用することとした。入手のための購入額は多少上がってしまうが、その分、単価を抑え、かつ、電子書籍として入手できるものを優先したのでご理解いただきたい。</p> <p>なお、紹介した 3 冊は、いずれも非常に評判の良いテキストであるが、本研究科で用いるには、若干、「帯に短したすきに長し」の点がある。テキスト①は「はじめての経営学」と銘打っているように、やや社会人のビジネスリサーチ寄りの事例や先行文献の紹介に偏りが感じられる。テキスト②は「そもそも研究とは何か」というところからスタートしてくれず、質的調査とは、と話を始めているので、その点が実務家院生に対する導入としては物足りない。その点においてテキスト③は、2021 年度受講生のスズメでとても分かりやすいテキストであると感じたため導入した。だが、学部生が恐らくメインターゲットであり、大学院の基本教科書とするには 1 冊では心もとない。また、紙ベースの本しかないため、万が一遠方の国在住者で、期間中に入手できない場合は、テキスト①②を読んで議論に参加し、テキスト③については他の人の発表で理解し議論ができるような授業運営を考えている。ただ、テキスト③は院生からのおすすめだけあって、とても平易でとっつきやすい書き方がされているので、これからの論文作成に不安な人は、授業に間に合わなくとも、通読するとよいだろう。</p> <p>以上、3 冊のテキストを読むときには、この科目における「使い道」を念頭に、ざっくり目を通していくとよい。読み飛ばしがあっても、議論の中で気づいて読み直しをすればよいのだ。大胆に読み進めてほしい。</p> <p>※テキスト入手が難しい事情がある場合は早めに掲示板やメールでご相談下さい。 ※繰り返しになるが、方法論のテキストは、数冊を合わせ読むと共通のポイントが浮かび上がり、理解が深まる。このため、上記テキストはじめ、以下参考文献で示す関連書に関心に応じて読むことをお勧めする。授業の中でも随時、他文献も紹介していく。</p>
<p>参考文献</p>	<p>・佐藤郁哉(2002)『フィールドワークの技法：問いを育てる、仮説をきたえる』、新曜社。</p> <p>2021 年度までは本書のみを教科書として用いていたが、海外在住者が入手に時間がかかる例があったため、受講院生への配慮として、比較的新しく入手しやすいテキストに変更した。しかしながら、上述の通り、本書は大学院生にぜひ読んでほしいものである。著者の佐藤は多くの本を出版しているが、今でも尚、「漸次構造化」「仮説生成プロセス」というキーワードを手掛かりに、初発の問題意識を論文におけるリサーチクエスチョンに向けて醸成していくプロセス自体に焦点を当ててテキストとしては本書が秀逸である。このため、入手できる人はぜひ手に入れて、第 3 章の「漸次構造化」を中心に読み込んでほしい。</p> <p>・ウヴェ・フリック『質的研究入門<人間の科学>のための方法論』(2002)春秋社。</p> <p>本科目では、必ずしも質的研究方法論自体を深めたい受講生が多くないため主テキストとしての採用は控えているが、学術的な研究方法論としての質的研究について網羅的に理解したい人は、本書が良テキストである。ぜひ入手して参考書として手元に置いておくことよい。博士課程院生は必ず一度は目を通すこと。また、関心があれば、主テキストではなく本書の一部を授業で発表してもよい。</p> <p>その他、授業開始後に適宜、関連文献を紹介していく。</p>

成績評価方法 と基準	原則として、担当セッションでの発表と司会進行をはじめとする掲示板での発言、コメントの書き込み（60％）と、最終レポート（40％）によって成績評価を行ない、総合評価60点以上を合格とする。
-----------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	社会調査とデータ解析	2単位
担当者	千頭 聡	
テーマ	社会調査の基本的な考え方や統計学の基礎を理解したうえで、多変量データの解析手法を学び、量的分析を行えるようにする	
科目のねらい	<p><キーワード> 量的調査 社会調査 統計データ データの収集と解析 多変量解析</p> <p><内容の要約> 地域社会開発を進めるにあたって、対象とする地域の社会経済的なデータの収集と特性把握、地域住民の意識構造の把握・分析などを行うことは、重要な支援ツールとなる。本科目では、地域住民の意識構造を把握するための社会調査の基本や留意点、各種統計的なデータの収集と統計的な分析手法などについて述べる。特に、地域開発の分野で役立つ多変量データの解析手法（分散分析、重回帰分析、因子分析、数量化Ⅰ類～Ⅲ類など）について紹介する。</p> <p><学習目標> 1 社会調査の基本的な考え方、調査方法、解析方法などについての基本を学び、自らの課題に応じた調査設計ができるようになる。 2 地域開発の分野で利用可能な多変量解析手法の目的や解析結果の読み方が理解でき、自らの課題に応じた手法の取捨選択ができるようになる。</p>	
授業の進め方	<p>配布するレジメおよびテキストに基づいて学習を進め、適宜、掲示板などを用いて質疑応答などを行う。</p> <p>第1回～第2回 データ解析の基本（データの見方、基本的な解析方法、既存の統計など） 第3回～第6回 社会調査法 （調査方法概論、調査票設計上の留意点、調査結果の集計・分析方法など） 第7回～第12回 多変量解析 （分散分析、重回帰分析、数量化Ⅰ類、判別分析、数量化Ⅱ類、因子分析、数量化Ⅲ類 など） 第13回～第14回 演習 第15回 まとめ</p>	
事前学習の内容・学習上の注意	<p>○社会調査（アンケート調査）については、自分の関心があるテーマに関わる調査票設計の簡単な課題を課す。また、多変量解析手法の適用イメージについてのレポートも課す。</p> <p>○指定したテキストを自主的に読むとともに、積極的に質問することを期待する。</p>	
本科目の関連科目	特になし	
テキスト	岩淵千明他「あなたもできるデータ解析の処理と解析」福村出版、2600円	
参考文献		
成績評価方法と基準	2回のレポート（50%ずつ）により評価する	